

# 神武東征は いつのことだったのか？

令和4年4月9日

角 野 章 之

考古学者でも歴史学者でもない「素人」の著者(下記)が、神武東征を中心に、古代日本を多方面から科学的・実証的に考察していることについて紹介する。

長浜浩明 著『日本の誕生』 皇室と日本人のルーツ(WAC)

## 縄文以前

氷河期と間氷期の周期は10万年（ミランコビッチサイクル）

最後の氷河期は1万5000年前ころ⇒寒冷化によりに海が後退

地球の地軸の傾き 4100年周期で21.5度～24.5度の間で変化

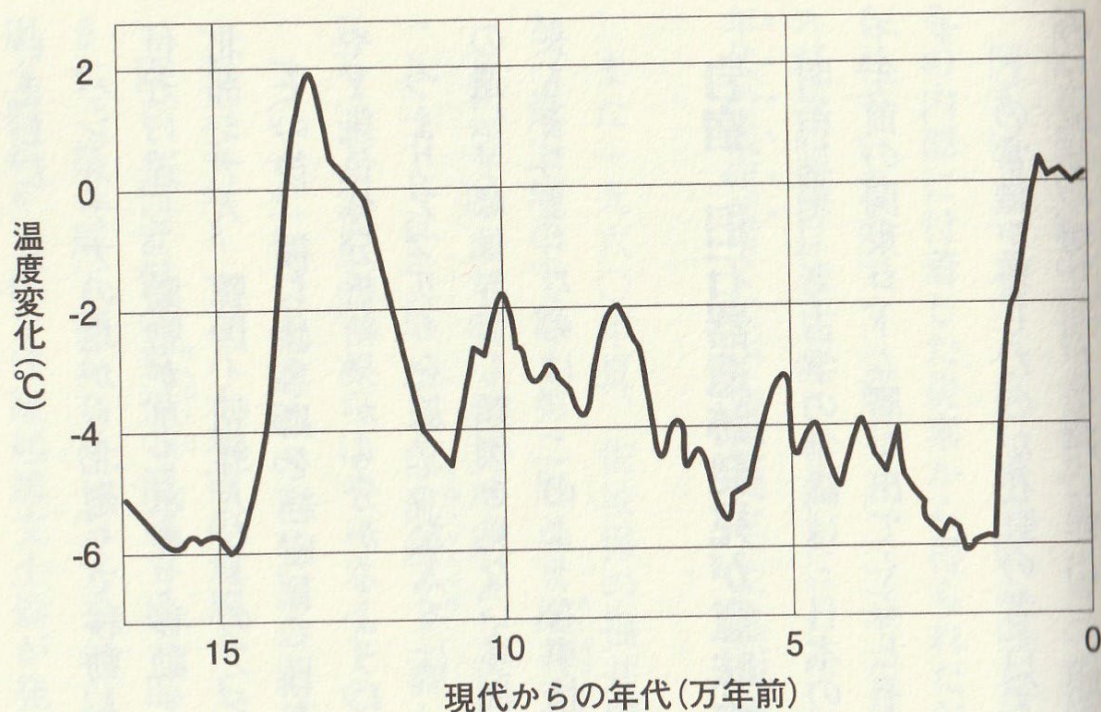


図5 南極ボストーク氷床コアから得られた気温の記録

## 縄文時代

寒冷期（海面が数百m低く、大陸と陸続き）に様々な人々が北方から南方から日本列島に来て、やがて大陸と切り離されて、1万年以上掛け融合し、地域ごとに異なる面を持ち合わせながら、共通の文化・言語を熟成させていったのが縄文時代ではないか。

日本列島の随所で縄文遺跡から夥しい無数の土器や1万8千点の土偶が発見され、**縄文時代には確固たる文明があった。**

3200年前の田圃跡（富沢遺跡（仙台市））が発見されており、この頃から稲作が始まっている。

**縄文遺跡からは武器が見つからない**事実から  
「1万年以上もの長い間、平和が続いた文明が存在することは、世界を見渡せば、想像を絶するほど珍しいことである。」

ヘンリー・スコット・ストークス

（元フィナンシャルタイムズ東京支局長）

## 主な縄文遺跡

三内丸山遺跡(青森県青森市)

江戸時代から遺跡が埋もれていることは知られていたが、県総合運動公園の野球場建設に伴う発掘調査で巨大遺跡群(5500年前～4000年前)発見 (平成6年発掘)東京国立博物館で展示



亀ヶ岡遺跡(青森県つがる市)

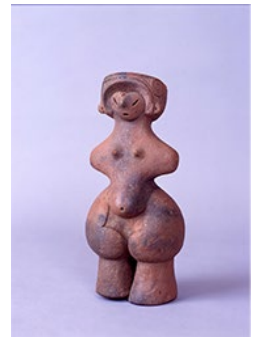
有名な遮光器土偶(重文)(3000年前～2300年前)  
(明治19年(1886年)出土)東京国立博物館で展示



棚畑遺跡(長野県茅野市)

土偶「先史時代のヴィーナス」(国宝)(5000年～4000年前)  
(昭和61年(1986年)出土)

長野県茅野市・尖石縄文考古館で展示



中ッ原遺跡(長野県茅野市)

土偶「仮面の女神」(国宝)(4000年前)  
(平成12年(2000年)出土)

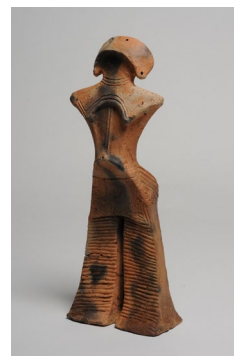
長野県茅野市・尖石縄文考古館で展示



西ノ前遺跡(山形県舟形町)

「縄文の女神」(国宝)(4500年前)

(平成4年(1992年)出土) 山形県立博物館で展示



是川遺跡(青森県八戸市)

「合掌土偶」(国宝)(3500年前)

(平成元年(1989年)出土) 是川縄文館で展示

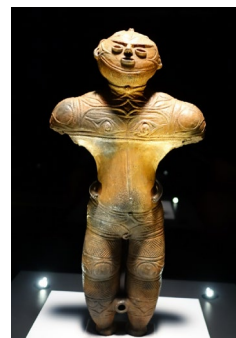


著保内野遺跡(北海道函館市)

「中空土偶」(国宝)(3500年前)

(昭和50年(1975年)出土)

函館市縄文文化交流センターで展示



笹山遺跡(新潟県十日町市)

火焰土器(国宝)(5300年前～4800年前)

(昭和57年(1982年)出土)

新潟県十日町市博物館で展示



真福寺貝塚(埼玉県さいたま市)  
「みみずく土偶」(重文)(4000年前～3000年前)  
(大正15年(1926年)出土)  
東京国立博物館で展示



JR吾妻線・郷原駅(群馬県東吾妻町)建設工事現場で発見  
「ハート型土偶」(重文)(4000年前～3000年前)  
(昭和16年(1941年)出土)  
東京国立博物館で展示  
岡本太郎 作『太陽の塔』のモチーフ



## 弥生時代 神武東征

神武天皇の實在は各地の神武東征の痕跡と傳承が脈々と残っていることから証明される。

神武以前にも50代から71代の皇統があったという古文書の考察を通して、「天皇の原型が生まれたのは縄文時代中期」にできた。  
(林房雄 著 『神武天皇實在論』)

「記紀のなかの神話の部分は日本古代民衆の自然な思考から生まれたもので、その成熟には少なくとも記紀が編纂される以前の数世紀を要した。

(中略)

南から北から西から日本列島に集まって来た諸種族が一信仰、一言語に統一され、一つの神話を生むまでには、少なくとも千年単位の時間がすぎたと想像される。」林房雄 著『天皇の起源』

弥生時代と縄文時代は明らかに重なる。

その時代に天皇がしらす(治める)という統治システムの原型ができた。

天皇の原型が生まれたのは縄文時代中期であり、神武天皇は東征後、奈良県の橿原で即位し、畝傍(うねび)山の麓に御陵が造営された。

# 神武東征

「古事記」より

「神倭伊波礼毘古命(神武天皇)、そのいろ兄(え)五瀬(いつせ)命と二柱、高千穂宮にて、はかりて云(の)りたまわく。

『何れの地にいまさば、平らけく天の下の政(まつりごと)をきこしめさむ。なお東にいかむと思う。』とのりたまいて、ただちに日向から出発して竺紫(つくし)国にいでましき。

かれ豊国の宇沙に到りましし時、その国人、名をウサツヒコ、ウサツヒメの二人、足一騰宮(あしひとつあがりのみや)を作りて大御饗(おおみあえ)献(たてまつ)りき。

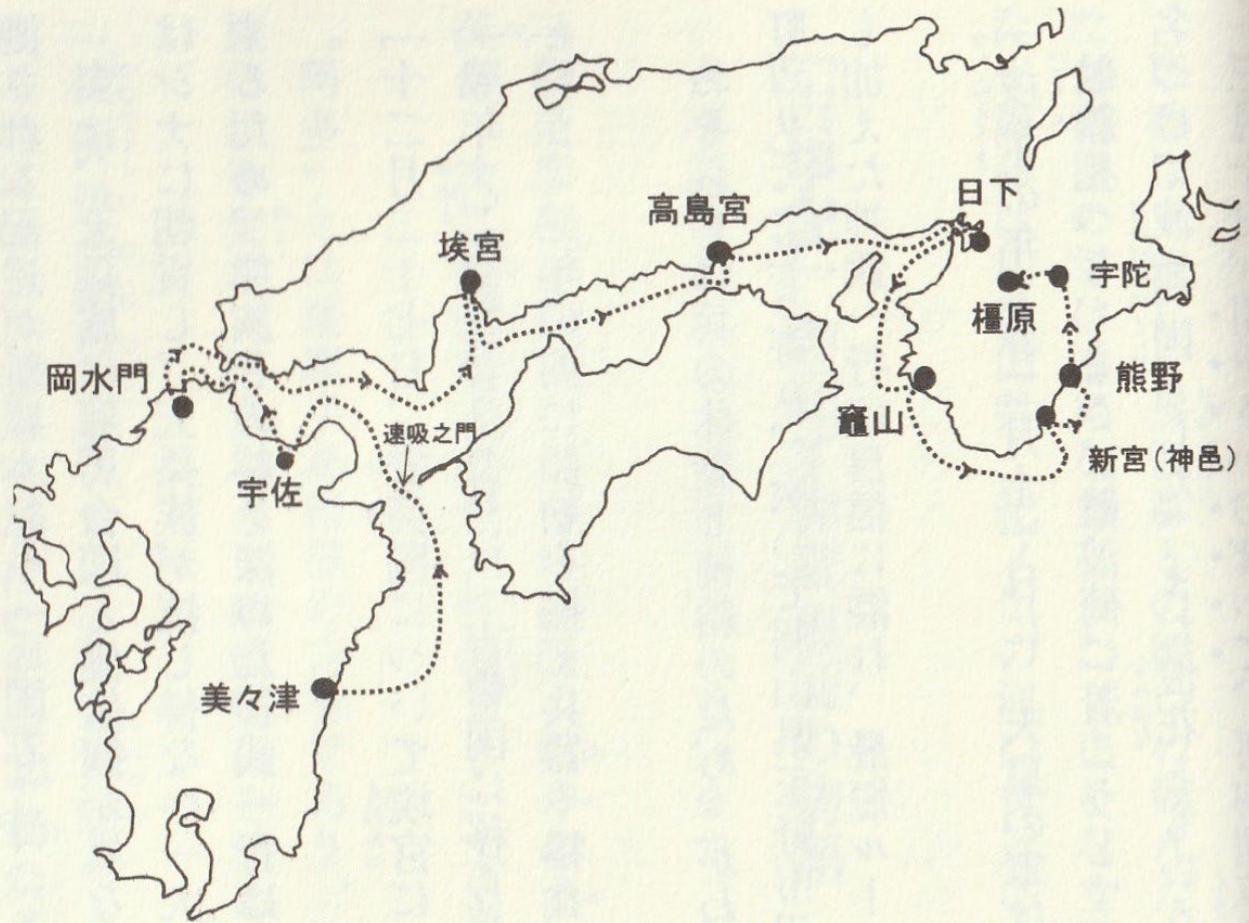
そこより遷(うつ)りまして竺紫(つくし)の岡田宮に一年(ひととせ)坐(いま)しき。

またその国より上りいでまして阿岐(あき)国の多祁理宮(たけり)宮に七年(ななとせ)坐(いま)しき。

またその国よりお遷(うつ)りいでまして、吉備(きび)の高島宮に八年(やとせ)坐(いま)しき。

(中略)

# 神武東征のルート(日本書紀)



『日本書紀』の記す神武東征ルート

かれ、その国より上りいでましし時、浪速(なみはや)の渡(わたり)を経て、青雲(あおくも)の白肩津(しらかたのつ)に泊(は)てたまひき」

※渡(わたり)とは大阪湾と上町(うえまち)台地の向こうに広がる水域(河内潟)とを結ぶ狭隘な開口部であり、神武一行はそこを通って白肩津(東大阪市 日下)に着いた。白肩津に上陸した神武一行は長髓彦(ながすねひこ)と戦ったものの苦戦、神武天皇の兄、五瀬命の腕に流れ矢があたり、やむなく大阪湾へと退却したルートを次のように記している。

「南の方(かた)より廻(まわ)り幸(い)でましし時、血沼海(ちぬのうみ)に到りて、その御手の血を洗ひたまいき」

※南の方(かた)、即ち阪急京都線の南方駅辺りにあった渡(わたり)を目指して漕ぎ進み、大阪湾へ逃れ出た。

「そこより廻り幸でまして、紀国(きのくに)の男之水門(おのみなど)に到りて詔(の)りたまはく、賤しき奴(やっこ)が手を負いてや死なむ、とおたけびして崩(かむあが)りましき。かれ、その水門をなづけて男の水門といふ。陵(みはか)は紀国の竈山(かまやま)にあり。」

(解説)

吉備の高島宮から出発した神武天皇の軍は大阪湾に漕ぎ進み、上げ潮に乗って南方(みなみがた)辺りの渡(わたり)を通して大阪城辺りにある難波碕に着き、さらに川を遡上して生駒山の麓にある河内国草香(くさか)村の白肩津に到着し上陸。

そこから進軍して長髓彦と戦うも敗れ、南方の渡(わたり)を通して大阪湾に逃れ出た。

大阪湾に逃れ出た神武一行は、紀ノ國の竈山(かまやま)に兄を葬り、熊野の神邑(かみむら)や熊野の荒坂の津に上陸、山中を進軍し、かろうじて勝利し、宇陀(うだ)から橿原の地に至り、第一代天皇として即位された。

この物語は写生の言葉と云われる日本語の特徴をいかんなく発揮し、そこに記載された地名は今日まで引き継がれていることが分かる。

長浜浩明 著『日本の誕生』より転載

神武東征のおり、長髓彦の抵抗にあい熊野山中を彷徨っていた際、高倉下(たかくらじ)が神武天皇に**師霊剣(ふつのみたまのつるぎ)**を献上したら、神剣が大いなる力を発揮し、神武天皇は橿原の地に無事に至ることができた。

※天照大神と高皇産霊尊(タカミムスビノミコト)が葦原中国(あしはらのなかつくに)を助けるべく、建御雷命(たけみかづちのみこと)を遣わそうとするも、建御雷命は「国を平定した剣があるので、それを降せばよい」と宣い、**師霊剣(ふつのみたまのつるぎ)**を天つ神の御子(神武天皇)に献上するよう、高倉下(たかくらじ)に命じられた。

また**八咫鳥(やたがらす)**が高皇産霊尊(タカミムスビ)により神武天皇のもとに遣わされ、熊野国から大和国への道案内をした。

※八咫鳥(やたがらす)は三本足のカラス(鳥)であり導きの神だが、勝利の導き手、勝利のシンボルという意味合いがあるため、八咫鳥を昭和6年(1931年)、日本サッカー協会はシンボルとした。

## 神武東征はいつ頃のことだったのか

著者・長浜浩明 氏(東工大・建築学科卒)は建築技術者として、ボーリングの地質データから、その土地の歴史を推察している。

### 大阪平野の歴史

古大阪平野の時代	約2万年前
古河内平野の時代	約1万1000年前～9000年前
河内湾Ⅰの時代	約7000年前～6000年前
河内湾Ⅱの時代	約5000年前～4000年前
河内潟の時代	約3000年前～2000年前 (西暦紀元前1050年～前50年)
河内湖Ⅰの時代	約1800年前～1600年前 (西暦150年～350年)
河内湖Ⅱの時代～大阪平野Ⅰ・Ⅱの時代	約1600年前以降

# 『大阪平野のおいたち』(青木書店)

## 古大阪平野の時代      約2万年前

今から2万年前はウルム氷期(最後の氷河期)の最盛期で  
海面は現在より100m以上低く、大阪湾から瀬戸内海は  
陸地だった。そこに流れ込む川は紀伊水道を通して太平洋に  
注ぎ、大阪駅付近は現在の地表面より約27m以上低く、  
そこにクヌギ林が広がっていた。

そして上町台地の東側、河内平野には淀川、大和川などの  
古大阪川水系が流れ、その東部・生駒山の麓には沼沢地が  
広がっていた。この時代を「古大阪平野の時代」と呼ぶ。

## 古河内平野の時代      約1万1000年前～9000年前

その後、地球の気温が上昇し、約1万1千年前、大阪駅の地下26mのクヌギ林は海面下となり、新大阪駅の地下20m辺りまで海水が流入してきた。  
しかしまだ河内平野に海水が侵入していないこの時代を「古河内平野の時代」と呼ぶ。

## 河内湾 I の時代

約7000年前～6000年前

その後も海面上昇は続き、  
6000年くらい前になると  
海水面は現在よりも高くなり  
(縄文海進)、海水は生駒山  
の麓まで押し寄せていた。

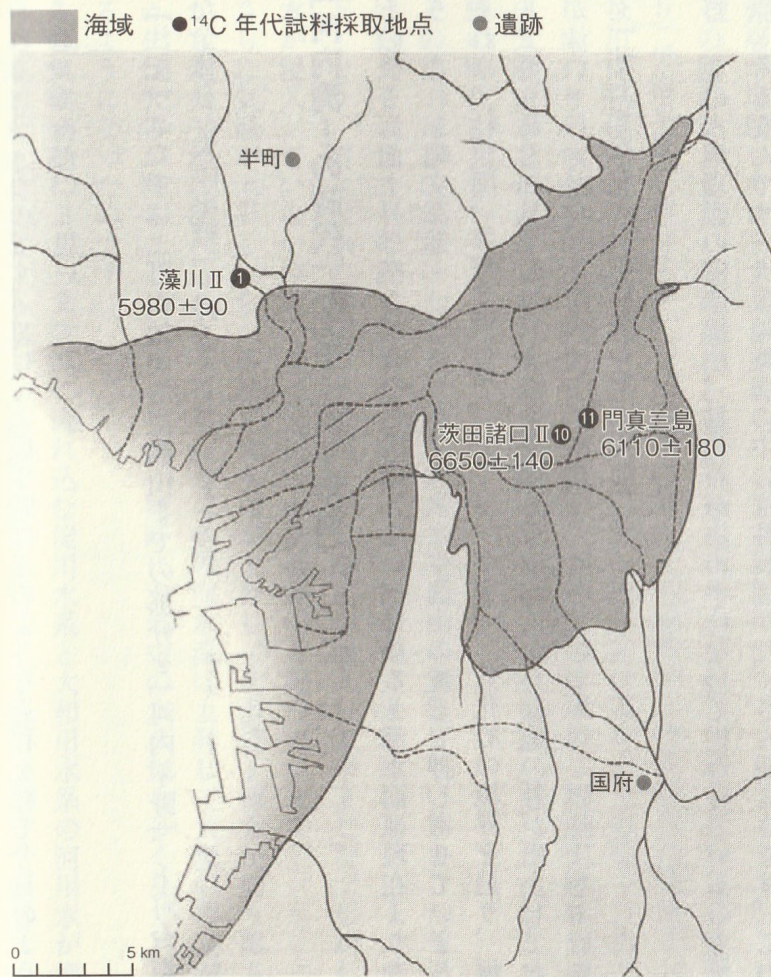


図13 河内湾 I の時代 (『アーバンクボタNo. 16』より地名を一部修筆)

※地名下の数値は、B.P (炭素14年代)を示す。  
B.Pは西暦1950年を基準年0B.Pとする。年代表記にあたっては、試料の測定年代に幅があることを考慮している (例：茨田諸口Ⅱの「6650」は「1950年の6650年前の試料」を、「±140」は「その前後140年ずつの280年間に収まる確率が約67%であること」を意味する)

## 河内湾Ⅱの時代

約5000年前～4000年前

大阪・森ノ宮に縄文時代から弥生時代に到る重層的な遺跡があり、この地に人が住み始めた5～4千年前、そこは海だったが、やがて汽水域となり、淡水化し、陸地化していったことがよく分かる。沖積作用(河川により運ばれた土砂が堆積する現象)により河内湾が段々埋め立てられたことを意味する。

第四章 神武東征を裏付けた「大阪平野の発達史」

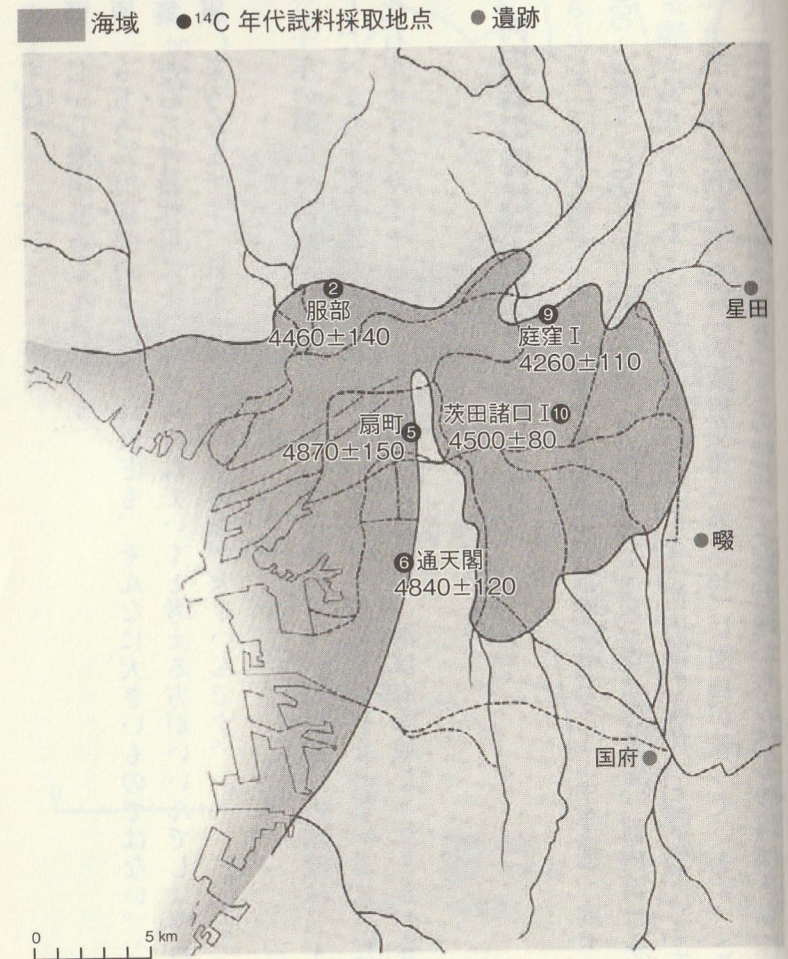


図14 河内湾Ⅱの時代  
(『アーバンクボタNo. 16』より地名を一部修筆)

※地名下の数値については、100頁を参照のこと。

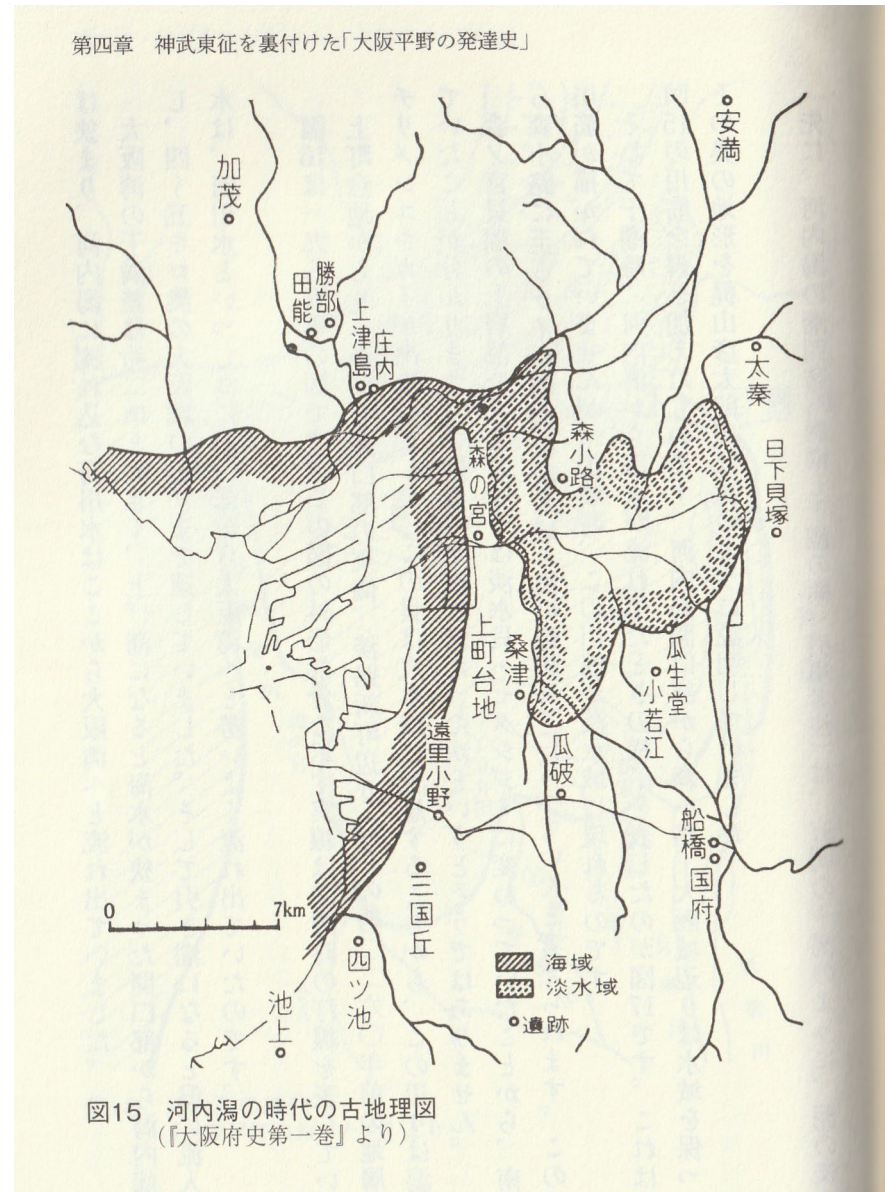
## 河内潟の時代

約3000年前～2000年前  
(西暦紀元前1050年～前50年)

さらに二千年が過ぎ、**約3千年前～2千年前(紀元前1050年～紀元前50年)**頃になると、河内湾はさらに埋め立てられ、海から潟へと変わっていった。

右図の時代、上町台地からのびる砂州はさらに北進し、開口部は狭まり、河内潟から流れ込む河川水はここから大阪湾へ流れ出ていた。

大阪湾の干満差は約2mと大きく、上げ潮になると海水が潟内部へ流入し、4～5キロ奥の大阪城辺りまで達した。



# 河内潟の時代

約3000年前～2000年前  
(西暦紀元前1050年～前50年)

右図の太い実線は満潮時の  
汀(みぎわ)線を示している。

第四章 神武東征を裏付けた「大阪平野の発達史」

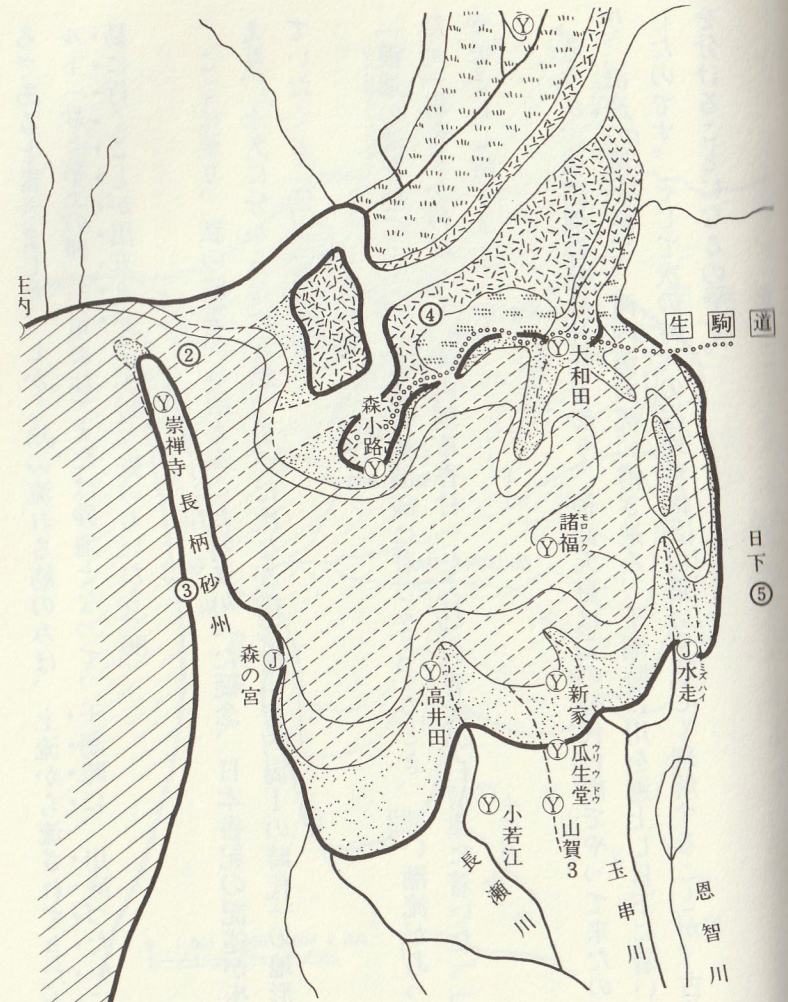


図16 河内潟の時代  
(『大阪平野のおいたち』より)

## 河内潟の時代

約3000年前～2000年前  
(西暦紀元前1050年～前50年)

右図は干潮時に河内潟から海水が流れ出た時の様子を表した図であり、前頁の図に2頁前の川筋を書き加えたものである。  
河内潟開口部から森小路―大阪城辺りは水域を保つ。

### 第四章 神武東征を裏付けた「大阪平野の発達史」

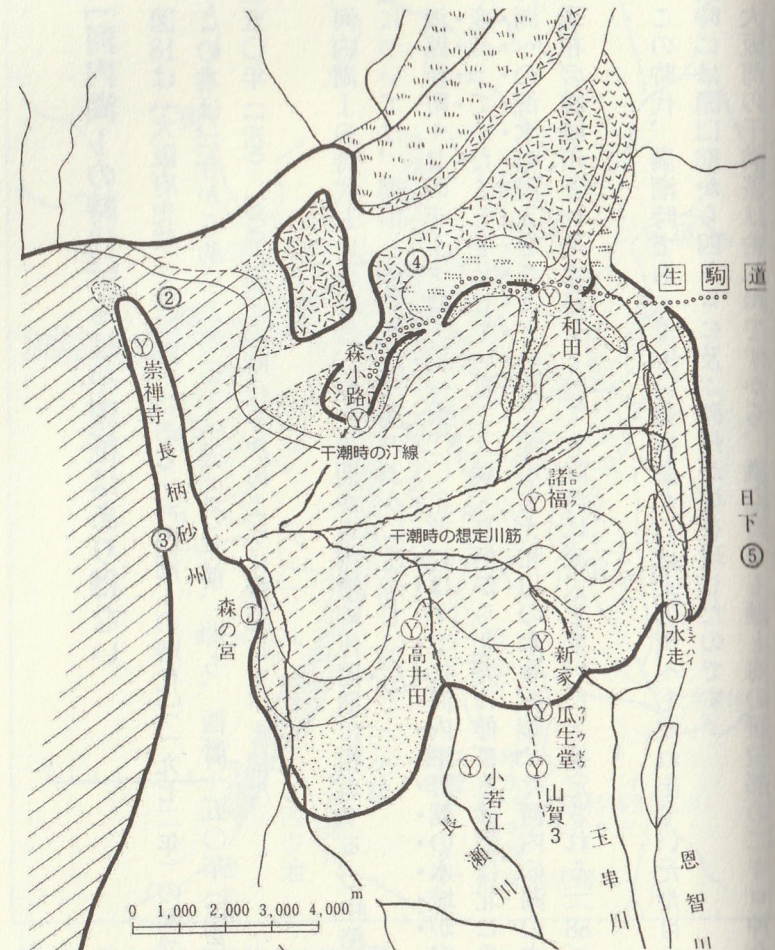


図17 河内潟の時代——干潮時  
(『大阪平野のおいたち』の図に加筆・修正)

## 生國魂(いくくにたま)神社の御由緒と社伝

大阪最古で大阪の総鎮守とされる生國魂(いくくにたま)神社の御由緒によると、「難波(浪速)と呼ばれた古代の大阪は南北に連なる台地より成り、三方を海に囲まれた奔流の打ち寄せるところであった。現在の上町(うえまち)台地である。この上町台地周辺の海上には、大小さまざまな島が浮かんでいた。大和川と淀川が上町台地の北端で交わって一筋の大河となし、上流より運ぶ砂礫が堆積して砂州となって次第に島々を形成したのである。

いわゆる難波の「八十(やそ)島」である。これらの島々がやがて陸地と化し、現在の大阪の地形が形づくられた。今も市内に残る堂島、福島、弁天島など「島」のつく地名が古代を物語っている。」

生國魂神社の創祀では「社伝によれば、神倭伊波礼毘古命(神武天皇)が御東征の砌(みぎり)、大阪の起源ともいえる上町台地の北端の地(難波之碕(現在の大阪城一帯))に、天皇の御親祭により、国土の平定・安泰を願い、大八州の御神霊であり国土の守護神である生島大神、足島大神をお祀(まつ)りされたのが、創始と伝わる。」

「浪速(なみはや)の渡(わたり)を経て……」

「まさに難波碕に着こうとするとき、速い潮流があつて大變速く着いた」

「川をさかのぼって、河内国草香村(日下(くさか)村)の青雲(あおくも)の白肩津(しらかたのつ)に着いた」

「南の方(かた)より廻り幸(い)でましし時……」

生國魂神社の社伝や記紀の記述とおり、神武天皇はこの時代に船でやって来られたのである。

浪速(なみはや)の渡(わたり)を経て、河内湍内に漕ぎ進み、干潮時に川を遡上し、日下に着かれたのである。

## 河内湖Ⅰの時代

約1800年前～1600年前  
(西暦150年～350年)

約1600年前には既に河内平野側の水域が完全な淡水湖に移り変わっていた。  
北方にのびる砂州は、北にのびきって、河内湖への海水の侵入をさえぎった。

この時代、満潮時であっても、淀川と大和川の水をあわせた河内湖の水は大阪湾へと流れ出ただけであった。  
干潮時には開口部から4キロにおよぶ砂州が姿を現した。

この時代に「早い潮流があって大変速く着いた」はあり得えない。

### 第四章 神武東征を裏付けた「大阪平野の発達史」

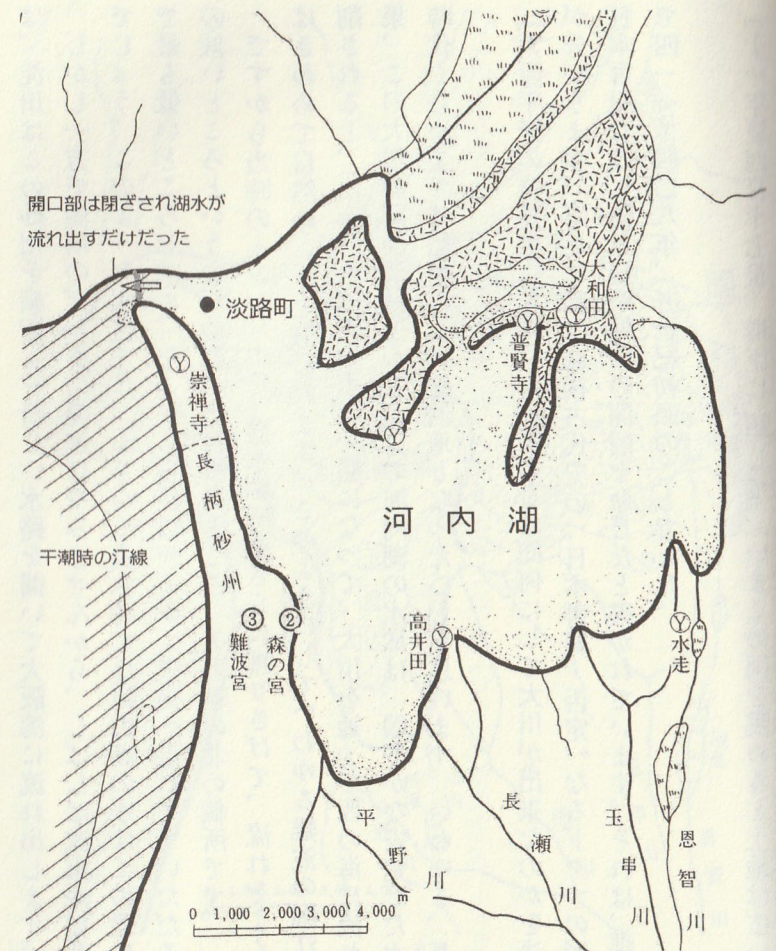


図20 河内湖Ⅰの時代——水面表示  
(『大阪平野のおいたち』の図に加筆・修正)

## 河内湖Ⅱの時代

この時代、生駒山の麓に深野池（ふこのいけ）や新開池（しんがいけ）は残っているものの、地形はすっかり変わっていた。

淀川デルタが発達し、淀川はこの砂州を横断し、新しい水路を開いて大阪湾に流れ出した。

洪水時にはこの砂州の最も低い所から西方の大阪湾に溢れ出た。

このため難波の堀江（現在の大川）が開削された結果、この大川の開削部付近から北方の河内湖の水域は穏やかな安定した水域となり、奈良時代くらいまでは船舶のよい碇泊地（長柄の船瀬）となった。

## 約1600年前以降

第四章 神武東征を裏付けた「大阪平野の発達史」

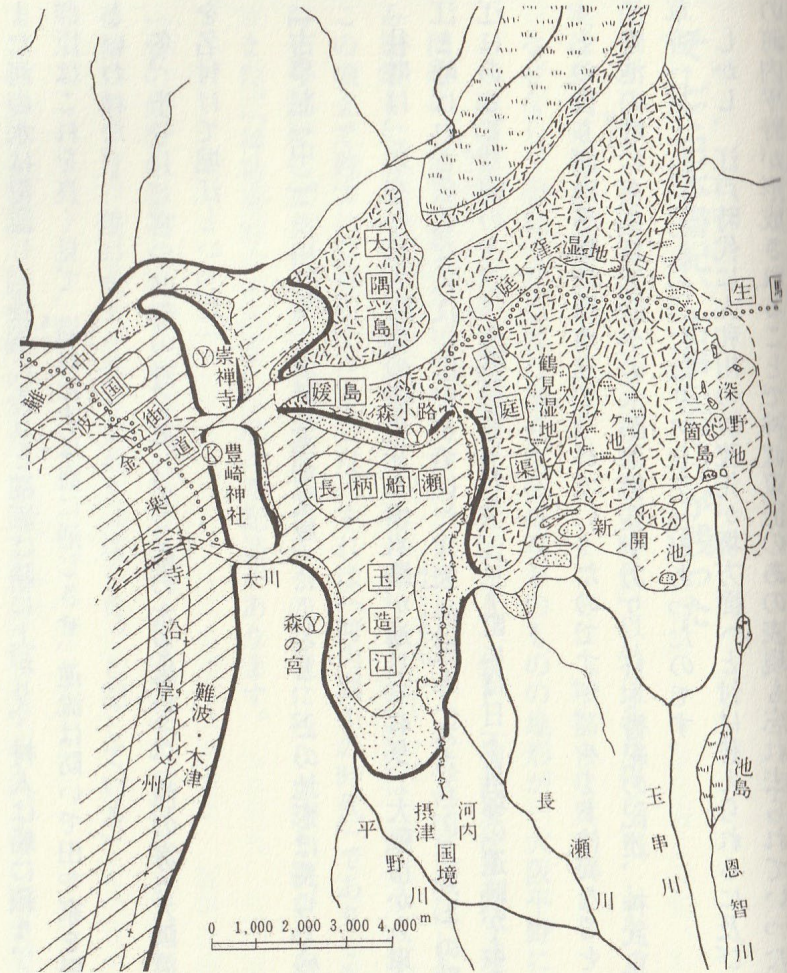


図21 河内湖Ⅰの時代  
（『大阪平野のおいたち』より）

日本書紀には、**仁徳天皇(西暦411年～428年)の堀江の開削**について、「十一月夏四月十七日、群臣に詔(みことのり)を発して、冬、十一月、宮の北部の野を掘って、南の水を導いて、西の海(大阪湾)に入れた。その水を名付けて堀江といった。」と書かれている。

その後も河内平野は埋め立てられていったが、ルートは異なるとはいえ、大阪湾から深野池(ふこのいけ)の畔(ほとり)にある日下への水路は健在であり、日本書紀の記述、神武東征時の「川を遡りて草香(日下)村に着いた」にはリアリティがあった。

しかし、江戸時代に大和川の放流先が堺方面へと付け替えられるに及び、川筋も消え、現在の河内平野が形成されことで神武東征のあの表現も忘れ去られていった。

神武東征は「河内瀉の時代」以外ではあり得ないとなったが、神武東征を否定する人にはまことに不都合な真実となった。なぜなら記紀に記された神武東征描写そのものの地形が、大阪平野に現れる時代があったことが証明され、生國魂神社の社伝とも一致し、神武東征を疑う理由が消えたからである。

ちなみに邪馬台国が東遷したという説も、魏志倭人伝によれば卑弥呼の死は西暦247～8年頃であり、その時代は「河内湖Ⅰの時代」であり、この時代に東征があったなら、記紀に記されたあのような描写が人々の記憶に残り、語り継がれるはずがない。

では、神武東征は具体的にいつのことだったのだろうか。記紀では、神武天皇即位は西暦では紀元前660年としている。

『日本の誕生』～皇室と日本人のルーツ～（WAC）の著者・長浜浩明氏は次のような手法でこの年代を推定している。

記紀では古代天皇の宝算(寿命)が大変長い。

(神武天皇 古事記137歳、日本書紀127歳)

この疑問を解くカギとして、古代日本では春の耕作と秋の収穫をもって年紀としていた。

即ち、現在の1年を、二年として数えていた。

著者・長浜浩明氏はこの数え方で古代天皇の在位年、崩御年を推定した結果、神武天皇の在位年、崩御年などを次のとおりと推定している。

### 【神武天皇の履歴】

前96年 宮崎県高原町狭野(さの)で誕生 (狭野命と呼ばれた)

前74年 東征に出立

前71年 大和盆地の南部を平定

前70年 春 一月一日、橿原宮で即位(27歳)

前56年 神淳名川耳尊(かむぬなかわみみのみこと)、第二代  
綏靖天皇誕生

前33年 神武天皇 崩御(64歳)

## 【所感】

考古学者でも歴史学者でもない「素人」だからこそ、先入観に捕らわれずに、多方面から科学的・実証的に古代日本の探求ができたものと考ええる。

### 第一章 日本人のルーツを解き明かす

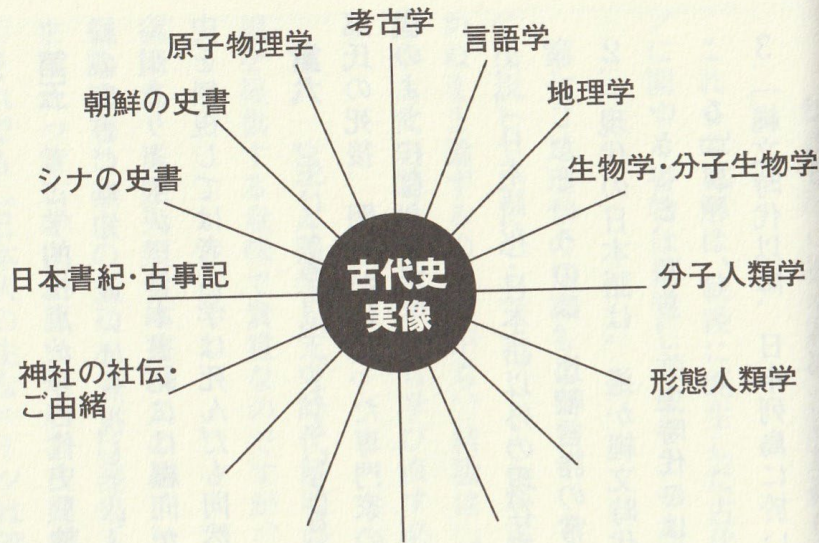


図3 古代は多方面から検証する

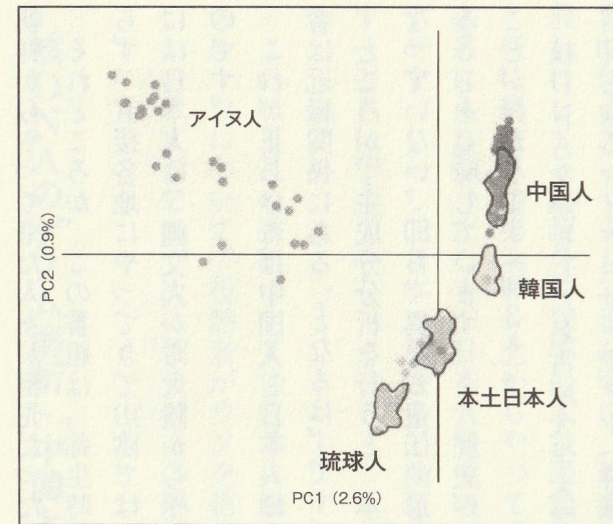


図2a 日本と中国・韓国人のDNA構成比較  
(別冊宝島「DNAでわかった日本人のルーツ」p.11 図4を一部  
改変)

# 参考文献

長浜浩明 著『日本の誕生』 皇室と日本人のルーツ(WAC)

宮崎正弘 著『神武天皇「以前」』 縄文中期に天皇制の原型が誕生した(育鵬社)

関雄二 著『「縄文」の新常識を知れば日本の謎が解ける』(PHP新書)

宮崎正弘 著『こう読み直せ！ 日本の歴史』(WAC)